

「喜びが満たされるために」  
ヨハネによる福音書 15 章 1-11 節

ヨハネによる福音書 15 章の「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」という御言葉は、キリスト教信仰の核心を表す愛唱聖句として、多くの人々に慰めを与えてきました。しかし同時に、この箇所には「実を結ばない枝は取り除かれる」「外に投げ捨てられて枯れる」といった厳しい警告も記されています。私たちは、祈りが続かない日々や、人を許せない心、自分を優先してしまう歩みを振り返る時、「自分は本当に主につながっているだろうか」「いつか見捨てられるのではないか」という不安に直面します。

しかし、ここで決定的に大切なのは、イエスがご自身のことを「まことのぶどうの木」とあると言われたことです。旧約聖書において、ぶどうの木はイスラエルの民を象徴していました。神は彼らを選び、育て、良い実を結ぶことを期待されました。しかし実際には、神の愛に応えるどころか、彼らは神を忘れ、自分の道を歩み、ついには「酸っぱいぶどう」、すなわち神の御心にかなわない実しか結ぶことができませんでした。

しかし、神は人間を見捨てず、新たにイエス・キリストをこの地に植えてくださいました。イエスは、かつてのイスラエルのように途中で抜き取られたり、悪い実をつけたりすることのない、永遠の命と祝福の源です。私たちは、この「まことのぶどうの木」につながることで、初めて確かな希望の中に置かれます。

私たちは、自分の努力によってキリストにつながるのではありません。農夫である神の手によって、キリストという木に「接ぎ木」されたのです。本来、酸っぱい実しかならない枝だった私たちを、神が一方的な憐れみによって結びつけてくださったのです。

接ぎ木をする際、幹には鋭い切れ目（傷）が必要です。私たちを主につなげるためにキリストが負われた傷こそ、十字架の贖いに他なりません。私たちが今、主の命に与っているのは、キリストが自ら傷を負って私たちを受け入れてくださったからです。

イエスは「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」と言われました。この「清い」という言葉は、「手入れをする」という言葉と同じです。つまり私たちはすでに、神の手によって整えられ、実を結ぶ枝とされているのです。それゆえ、取り除かれることを恐れる必要はないのです。私たちの将来には、約束された確かな希望があるのです。

イエスがこれらの言葉を語られた目的は、私たちを追い立てることではなく、「わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるため」（11 節）でした。

この喜びとは、自らの達成感や満足ではなく、父なる神に愛され、死に打ち勝ったイエスご自身の復活の喜びです。私たちは今、キリストの復活の命に結ばれた者として、その喜びに満たされているのです。

横浜本牧教会が新しい一年の歩みを始める今、私たちは不安に支配される生き方から、主の喜びに生かされる生き方へと招かれています。自分で実を作ろうと力むのではなく、まことのぶどうの木である主の命に委ね、共にその約束の中を歩んでまいりましょう。